



ガラテヤ人への手紙 1-6章

ガラテヤ人への手紙

ガラテヤ人への手紙 1-6章

2016.1.27

4:12-5:1 自由の子

ガラテヤ人の正し

約束の自由の子

5:2-6:16

割礼、十字架

大祭司は信仰

大祭司は新しい被造物

肉、御霊、神、実

御霊によって生きる

1:6-2:14 ケパの父

1:6-2:14 ケパの父、福音、真理

割礼を受けた人、異邦人

1:6-2:14 ケパの父は2:14#2

2:15-4:11

信仰による義、律法の下にない

アブラハムの子、相続人

〜の下にいる、約束、御霊を受ける

・3:1-4 恵み、御霊、神、実

・4:8-11 恵み、御霊、神、実

信仰による子孫(種、裔)

父アブラハムの約束を信じる

ガラテヤ人への手紙の分析をしていますが、1章1節から5節が導入になっています。

1節から3節と、4節から5節の2つ。最初(1:1-3)は使徒パウロ。パウロは誰なのか、人間からではない、キリストと父なる神によって使徒になった。死者の中からよみがえらせた父なる神によって使徒になりましたというところから始まります。次に(1:4-5)もう一度、悪の世から救うため、十字架によって父なる神のみこころがなされました。どうか、どうか…、恵みと平安、栄光ということで、生まれること(1:1-3)と、罪の赦し(1:4-5)のような導入になって、この2つがガラテヤ人への手紙の主要なテーマであろうと思われます。

いろいろ分析してきましたが、今日の段階でこの大きな4つは、このような4つではないかということです。

1章6節から2章14節。前回までのと違うのが、パウロがケパに対して言いましたというところが、14節で終わっているのか？2章21節までなのか？この新改訳の「」でいうと21節までなのですが、☆印が付いているように14節の短いところまでということもできますということで、そちらが正しいだろうということで、このかたちになりました。

2章15節からは、信仰による義。律法の行いによらない。アブラハムの子孫、相続人というようなことが次の段落にきて、4章12節からのところは、最初(1:6-2:14の段落)は

パウロの証しだったのでしたけれど、ガラテヤの教会の証しをわざわざ4章15節で言っています。「私はあなたがたのために証しますが、あなたがたは熱心に私を慕ってくれた…」というようなこと。

5章2節からのところで、大事なのは信仰です。大事なのは新しい創造ですと言って、肉と御霊の戦い、どういう実を結ぶのかというのが、この5章2節からのところという大きく4つに分かれるだろうと考えています。

最初の段落(1:6-2:14)は、パウロの証し、福音や真理、割礼を受けた人、異邦人というようなキーワードがありますが、パウロは父である。あなたがたの父であるパウロ。最初のところ(1章のところ)にも父なる神が強調されていたでしょう。パウロは「私は父である」ということを言って、4章12節からのところで、「あなたがたはその子ども、自由の子ども」である。わたしが自由であったようにということです。人間、肉ではない使徒であったように、あなたがたも自由の子どもであるということが強調されています。

2番目のところ(2:15-4:11)で、アブラハムの子孫は誰か。本当のアブラハムの子孫は誰なのか。信仰なのか、律法の行いなのか、約束の御霊を受けるのは誰なのかということとをずっと話していますが、信仰による子孫がアブラハムの子孫。神様の子どもですよということを、2章15節から話しますが、2章15節を4つに分けたときの、3章1節から4節に「ああ、愚かなガラテヤ人、あなたがたがあれほどのことを経験したのは無駄だったのですか。そんなことはあつてはいけません。」というところがあります。この段落の終わりの4章8節から11節のところに、「神は知らなかった、神は知っているのに、神に知られているのに」と言って、「私の労したことは無駄だったのですか。まさかそんなことはないですよ。」と言って終わっていく。愚かなこと、知ることということです。もう一度「善悪の知識の木の実」を取って食べているような感じですね。元に戻ってしまった。その罪を赦されたのに、また同じことをしている。ああ愚かな、その知恵が与えられたのに、また逆戻りしている。逆戻りしているというのが、8節,9節のところに2回あります。その子どもとして生まれたのに…というのが強調されているところです。

5章2節からのところは、そこも4つの段落に分けられますけど、そちらは、割礼を受けるか受けないかは大事ではなくて、愛によって働く信仰が大事ですということが最初の段落。最後の段落に、同じように、割礼を受けているか受けていないかは大事なことでありません。大事なのは新しい創造です。大事なのは新しく生まれることですということが呼応していますね。その間に肉と御霊の戦い。御霊の実を結ぶ、刈り取るというようなことがあります。(2:15-4:11)信仰によって義と認められてアブラハムの子孫となると言っているほうは、種の話をしている。信仰の種。その信仰の種が正しく植えられるならば、(5:2-6:16)御霊の実を結ぶ。約束の御霊が与えられて、御霊の実を結ぶということです。この2つ。子とされて(2:15-4:11)御霊を受ける(5:2-6:16)という2つのことが大きな段落の中で説明されて、ガラテヤ人への手紙は、新しい創造の始めの出エジプト。割礼を受けて、連れ出されて約束の地に入って御霊を受ける、みことばを受ける。その連れ出されるところと、受けるところというのが、ガラテヤ人への手紙の全体のこと。新しく生まれる、御霊によって歩む、命を得る、死ぬな!ということを書かれている手紙の概略かなと考えています。